





書評 東 琢磨

この『〈原爆〉を読む文化事典』である。

しかし、二〇〇四年に花田俊典氏が急逝されて計画は頓挫した。その後しばらくは事典を作れない状況が続いたが、二〇一二年ごろから川口氏を中心に事典作りが再始動し、最初の計画からいわず十数年越しに刊行されたのが

今回の五四回目となる原爆文学研究会では、これまでに実に多くの著作を取り上げて批評を行ってきた。今、この研究会と関わりが深いこの本を自ら批評に晒すことは、ぜひとも行わなければならないと考えて今回のワークショップを企画した。この本を研究会の組上に載せ、それをクリエイティブに読むことは〈原爆〉に関わる課題を洗い出し、これからの「原爆文学研究」のあり方を考える上で有意義なことだと考える。

このワークショップでは、会員外から東琢磨氏と権赫泰氏、会員から伊藤詔子氏と川口隆行氏にご登壇いただく。最初に、『ヒロシマ・ノワール』（インパクト出版会、二〇一四・六）をはじめとする多数の著書などにおいて「ヒロシマ」について刺激的な発言を続けてこられた東琢磨氏、日本や韓国の論壇で原爆言説につ



書評 権 赫泰

いての議論を展開し、『平和なき「平和主義」』（鄭栄桓訳、法政大学出版社、二〇一六・七）の著者でもある権赫泰氏、『デイズマル・スワンプのアメリカーナネサンス』（音羽書房鶴見書店、二〇一七・五）をはじめソロに発する多く



書評 伊藤 詔子

著者である川口隆行氏から応答していた。最後に、参加者全員による討論を行うことで、この本から見えてくる課題を探りたい。

この特集には東氏・権氏・伊藤氏に当日のご発言をもとにご執筆いただいた書評と、それらに対する川口氏からの応答を掲載する。それぞれの詳細はそちらをご覧ください。ここでは当日の全体討論の主な内容を要約して紹介する。



応答 川口 隆行

の項目で取り上げる形にしているという応答もあった。しかし、部落差別と被爆者差別という二重差別の問題をもっと大きく取り上げてほしかったという声も上がった。次に話題になったのは、川口氏がこ



司会 中野 和典

うことであった。これについて川口氏は、それが「よい物語」か「悪い物語」かを判断することは単純化できないので、特に事前の判断基準は設けず、それぞれの執筆者がその「物語」をどのように意味づけ、引き受けるかが現れていけばよいと考えて編集した、個人的には例えば運動が内部に批評性を持つているかどうか、そして、どうすれば「悪い物語」の生産に陥らずにすむのかという点に注目していると応答した。

次に話題になったのは、この本の第Ⅲ部のタイトルになっている「語る／騙る」の、特に「騙る」についてどう考えるか、ということであった。これについては、「語る」と「騙る」は切り離せないのではないか、「語る」中に「騙る」ことが含まれ、「騙る」うちに「語る」ことが生まれるというような一体のものとして考える必要があるのではないかと応答があった。また、「語る／騙る」こととセットで、語られにくいことも含めて、どのように聞くのか、という聞き手の問題があるという発言もあった。これらの他にも、さまざまな感想や情報の提供などがあり、当日は予定の時間を超過してしまった。議論は尽きないが、『(原爆)を読む文化事典』とこの特集が、「原爆」の問題を問いなおす思考をますます活性化させることを期待している。